

## ヨーロッパ中世前期の商業

堀内一徳

## はじめに

最近における中世ヨーロッパ経済史の研究は、どのような対象に向けられ、どのような方向をたどっているか。その前期に限り、流通過程にのみしぼって以下に紹介を試みたい。

まず、さしあたつて、中世ヨーロッパ経済史の起点は、何に求められるべきか。ドープシュの「文化連続性」を引合いに出すまでもなく、ローマの文化遺産が、どのようにゲルマンに受容されたか、すなわち、ローマ帝国支配下におかれた地域とスカンジナビア及至東方へ向うゲルマンの定住が進展したその経済的構造の相違が、出発点となる。換言すれば、一方は他方より豊かに古代文化を保持し、商業と貨幣経済に優位を示すという差違が前提となるであろう。今日では、そのような地域的相違の濃淡が、いかに緻密に色どられているかは、例えば、H. J. Eggers, *Der römische Import in freien Germanien*, 1951. が端的に物語っている。ローマ・ゲルマンの通商関係の研究は、古くして、新しい課題である。古典史料をどう読み直してみても、新奇な解釈の添加される余地はない。しかし、Eggers

によつて整理、集成された豊富な発掘のデータは、古典史料の間隙を充実し、隔地商業 (*Fernhandel*) と境域商業 (*Grenzhandel*) を判別することによつて、従来の唯一の包括的研究 O. Brogan, *Trade between the Roman Empire and the Free Germans*, (*The Journal of Roman Studies*, Vol. XXVI, 1, 1936) の引いた粗略な商路を根本的に書き改めた。ローマン・ゲルマンの経済的接觸面の検討は、同時に、あらたにヨーロッパ経済の担い手となつたゲルマン独自の経済発展の方向を正しく見きわめる営みと表裏する。そのような営みから、ドイツ経済史における「連続性の問題」が、しばしばとりあげられている。といつても、ローマ・ゲルマンの連続性の問題は、もはや背景においやられた形となり、ゲルマンの商業習慣の未成熟、頑強な都市居住の拒否等が論じられる限り、この問題は、専ら O. Hefler が提起した「ゲルマン的連続性」 (*germanische Kontinuität*) に単純化されたといつてよむべきであらう。すなわち H. Mitteis のいう如く、「連続性」なる用語は、ドイツ史に関する限り、今日、「ゲルマン的連続性」以外に使用しない方が賢明であるとの意見が強い。

ビレンヌとドーブシユのカロリング經濟をめぐる鋭い対立は、今日なお解消されぬいくつかの問題を残している。ドーブシユ説が、地域の差異を付して容認されるとしても、ビレンヌ・テーゼは、ここ数十年はげしい批判の的とされてきた。しかも、そこから中世經濟研究の多くの実りがかち得られたといつても過言ではあるまい。ビレンヌ・テーゼを想起してみよう。

イスラムの進出は、地中海的統一を破り、メロビンク時代に維持された東方および古代文化との連係は断たれた。カロリング時代は全くの經濟の没落期であり、大所領によつて象徴される農村化により、都市は衰退し、商人は小売商人の段階へと後退した。この經濟の後退は、ヴァイキングの侵寇により強化される。

しかるに、一〇世紀末から、ヨーロッパの經濟復活が、ヴェニスを経由して東方からの影響下におこり、新しい商人階級の出現は、都市に重要性を與え、三世紀間ささやかな商業をいとなみつつけた小売商人やユダヤ人にとつてかわつた。かかる商人は、当初一定の住居をもたぬ冒險商人であり、農村の過剩人口に由来する。そして、彼等の定住をもつて都市の成立を理解する。

このテーゼの後半の部分は、いまなお大巾に容認されているが、前半の部分に、種々な側面から反ばくしないし修正論が提出されている。經濟(商業)衰退の論拠とするアラビア人の地中海進出にともなう香料、絹織物、パピルス等の東方物産の消失は、D. C. Dennett, R. S. Lopez, M. Lombard 等の批判および修正によつて、一様に否定されている。これらビレンヌ批判の詳細は、すでに増田四郎氏「カロリング王朝フランク王國の經濟環境」(一橋論叢、三二卷四号、

一九五四年)および平城照介氏「ビレンヌ・テーゼ批判」(學園論集、第二号、一九五六年)が、紹介しているので省くが、これら所論は、イスラム側史料、ビザンツ側史料あるいは錢貨學のデータに依拠するかの相違こそあれ、ヨーロッパ經濟が、イスラムの地中海進出により封鎖されたものでない事情を明らかにしている。そのみか、ロムバールのように、イスラムの征服がヨーロッパ經濟の発展に及ぼした積極的役割さえ賦与する向もある。七世紀後半の地中海沿岸フランスの貨錢の分布に、イスラムが殆んど変化を与えていない(P. Genthonnes)ことからすれば、ドイツ學界において、ビレンヌ・テーゼが、ゲルマン人をアラビア人に置きかえた「没落説」(Katastrophenheorie)と評されるのも、由なしとしない。

## 一、地中海商業

さて、ビレンヌ批判にビザンツおよびイスラム史料の新しい光が投じられたことは、すでにのべた。イスラムが中世初期の地中海商業に消極的あるいは積極的いずれの役割を演じたかはともかく、イスラムの進出を契機する西ヨーロッパの經濟が、地中海商業を介してビザンツ、イスラム經濟圏との相關々係の裡に把握されるべきであるという方法が、そこからクローズ・アップされる。

ビザンツの歴史は、いわば商業と財政々策の歴史であり、コンスタンチノーブルの經濟的推移は、そのまま中世商業史だといえる。したがつて、ビザンツ自体の商業史・都市等の研究は決して少しとしないのだが、さらに、西ヨーロッパ・イスラム諸國との經濟的連関を明確に意識した研究というのは、ほとんど見当らなかつた。そ

れ故、ビザンツ絹織物工業と圍管工業の性格を解明した Lopez, *Silk Industry in the Byzantin Empire* (Speculum, XX, 1945) 等及び、ビザンツ商業の繁栄の源泉たる通貨 (nomisma) の安定性の秘密を明らかにした The Dollar of Middle Ages (Economic History Review, vol. 1951) 及び、ビザンツ商業の基本的性格をイヌラム、西ヨーロッパとの地中海をめぐる國際商業の一環としてとらえんとする点で、新生面を切り開いたといえる。そして、最近におけるビザンツ史の研究成果とあいまつて、ビザンツを西ヨーロッパ・イヌラム諸國との通商關係への一層鋭い接近がすめられるものと思われ。

他方、イヌラム商業については、右のような視角から、かならずしも、われわれが期待するような研究がなされているわけではなく。古典的名著 Heyd, *Histoire du Commerce du Levant au Moyen âge*, 2 vol., 1923 など及び M. de Goeje, *International Handelsverkeer in de Middeleeuwen* (Verslagen en Mededeelingen derKoninklijke Akademie van Wetenschappen, Afdeling Letterkunde, 4th ser. IX, 1909) のほか、今日にいたるまで、まず日ほしい著述、論文はあらわれていない。ただひとり M. Lombard, *L'or musulman du VII<sup>e</sup> au XI<sup>e</sup> siècle*, (Annales; Economies, Sociétés, Civilisation, II, 1947) の述べた業績が、光輝を放っているのみである。ロムバールの研究は、イヌラム經濟の一つの特殊部門であり、それに、あまりにもシェーマ的に構成されすぎるくらいはあるが、イヌラム商業の基本的傾向をついた画期的論文といえる。ロムバールのシェーマを簡単に紹介すると、

ローマ末期以来、メロビンク時代を通じて西方の金は、東方の奢侈品購入の結果、レヴァント商人によつて東方市場にもち去られ、銀貨を通貨とするペルシアを中心に退蔵された。これらの地域を席巻したイヌラムの征服が國際商業に加えた変革は、「アジアの蓄積」により流通過程から没し、退蔵された金の「地中海的使用」(貨幣)への誘致である。イヌラムの征服が、地中海經濟のあい路を打開し、西ヨーロッパを世界通商の流れに結合し、その商品の販路をオリエントの諸都市に開いたこと、ササン朝の王宮やシリアの修道院に眠る金を流通過程へ投入したこと、スダン金鉱の開発等、要するに、イヌラム勢力の拡大は、商業活動の活潑化と金の支配をもたらした。金獲得を背景とするイヌラム諸都市の購買力は、西ヨーロッパが供給しうる奴隸および船舶用木材、鉄、毛皮等の原材料の輸入を可能にし、その見返りとして、イヌラム金が mancus 貨の形で西方へ流入しはじめる。就中、西方の対イヌラムへの輸出の主位を占めたのは奴隸(ほとんどのブラック・マーケットを通じて売買された)であつた。この結果、メロビンク時代には半ば停止していたビザンツ商品の買手市場が復活され、一段と金流入度が高まる一〇・一一世紀には、ビザンツの仲介する奢侈品は、再び西ヨーロッパに有力な販路を見出す。一方、北方では、イヌラムからの金の流れは、地中海を經由せず、バクダッドからヴォルガ河、バルト海、中央ヨーロッパ等を経てフリースランド、フランドル・ラインの諸地方に波及する。イヌラム商人は、カスピ海からロシア諸河を経て、ゲルマニアおよびバルト海に到り、北東ヨーロッパを貫く新商業路を開く。かくして、地中海イヌラム圏から発した金の流れと、オリエントの

イスラム圏を起点とするそれが、北西ヨーロッパに合流する。

ところで、西ヨーロッパの国際商業は、対ビザンツ、イスラムの二つの窓口をもち、対イスラムの出超、対ビザンツの入超という貿易収支を保つ。イスラム金により、西ヨーロッパは、ビザンツ商品への購買力を獲得するが、ビザンツは、西方から得た金によつてイスラム諸国から香料、生糸、象牙、宝石等の輸入を可能とする。ここに、イスラム世界から西方へ、西方からビザンツへ、ビザンツからイスラムへと金の循環路が完結する。西ヨーロッパの「商業復活」は、かかるイスラム金の回流を起因とする。

以上が、ロム・バル説の骨子である。さらば上の金の回流を基調として、都市發達の因由を説明せんとする企図。M. Lombard, *L'évolution urbaine pendant le haut Moyen âge* (Annales, Economies, Sociétés, Civilisation, 1957) が、發表されており、すでに本誌(第四一巻一号、一九五八年)で、鯖田豊之氏が紹介されている。中世前期においても、金が国際貿易決済の主要な手段であつたとはいへ、ロム・バルの所論は、あまりにも大胆な中世経済史を貫く構想といわねばならない。西ヨーロッパの流通経済が、ロム・バルの説く如く、イスラムの征服によつて全く促進されたか、否かは別として、ひるがえつて西ヨーロッパ自体の金ないし金貨の問題は、どう考えるべきか。

ローマ末期からメロピング時代に亘る、東方物産購入が惹起した西方から東方へのおびただしい金の流出の過程(「長い血の出る負担」)は、M・ブロックが詳しく分析したところである。では、カロリング時代初期以後、公的な金貨鑄造を停止した西ヨーロッパに

おいて、金は流通過程から脱落したもののか、退職されたのかどうか。金ストックは減少したか。ビザンツ・オリエントおよびイスラム諸国との商業が、いかなる関係をもつたか。これら中世における金の問題で總括されるテーマは、

Ugo Monneret de Villard, *La Monetazione nell' Italia barbarica* (Rivista Italiana di numismatica XXXII, 1919, XXXIII, 1929, XXXIV, 1921)

H. Van Wervecke, *Monnaie, Lingots ou Marchandises* (Annales D'Histoire Economique Et Sociale, IV, 1932)

M. Bloch, *Le problème l'or au Moyen âge* (Annales, D'Histoire Economique Et Sociale V, 1933)

F. Lot, *nouvelles recherches sur l'impôt foncier et la Coopération personnelle sous le Bas Empire*, 1955. (四世紀から七世紀の金)にうつての記述。)

等の論義の対象とされてきた。これらの所説から、カロリング時代及至中世前期ヨーロッパの金の問題を綜合すると、核心はほぼつぎの三点に要約されると思ふ。

①西ヨーロッパの金ストックは、従来予想されていたよりはるかに多量なこと。(Lotは四一六世紀を通じ金の大量ストックの存続を指適する) ②この金の確認できる部分は、鑄貨の形で流通していた③かかる鑄貨は、一部の例外を除いて、西ヨーロッパで鑄造されたのでなく、イスラムの *dinar* 金貨である。

当面の問題は、③のイスラム貨の流入量の評価にかかつている。イギリスの錢貨学者 P.H. Grierson は、かかるイスラム貨の西ヨーロ

マハへの大量流入の過大評価に疑義を感ずる。(The Myth of the Mancus, Revue Belge De Philologie Et D'Histoire, J. XXXII, 4, 1954) 彼によれば、文献上、錢貨学上、西ヨーロッパのイスラム貨の流入は、確認しうるけれども、一部はなお推論の域を脱しない。かつ、ロムバールのいうように、イスラム金貨が奴隷購入の支払手段として西ヨーロッパへ流入したとの事実も憶測にすぎない。むしろ、イスラム金貨は、奴隷よりも、奢侈品との交換ないし、加工品の買付けのために費されたとする方が妥当であるし、mancus 貨はすべてイスラム貨なりとの従来文献上の解釈が、かならずしも成立しないことを錢貨の分布から明かにしている。これに関して、R. Latouche も近著 Les origines de l'economie occidentale, 1956 のなかで、上記のことを指適している。奴隷商業は、イスラムの征服後、極めて大きな発展をとげた。奴隷は、イスラム商業のターミナルであるイスパニアで輸入され、奴隷輸出によつて、イスラム金の若干とササン朝の dirhem 銀貨が、西ヨーロッパに流通しはじめたことも否めなう。しかし、奴隷商業の重要性を、余りに過大評価することはできぬ。加えて、デンマークの錢貨学 S. Bojin は Mohammed, Charlemagne and Runic (Scandinavian Economic History Review, t. I, 1953) で、イスラム銀貨の北ヨーロッパへの大量流出——ロムバールもある程度みとめているが——を示唆している。とすると、どうやらロムバールの描く如き、イスラムと西ヨーロッパの通商関係の成立の根拠が、薄弱となりつつある形勢は、ぬぐいがたい。その点に關しては、A. E. Lieber, The International Economy of The Early Middle

Ages, An essay Islamic economic history, (未刊) が、何らかの解答を用意しているのと思われ。

つきに、金の問題と直接むすびつく中世前期の國際通貨の意義が考慮される。たとえ、中世初期において、貿易量は少なかつたにせよ、地中海商業の主要な交換手段としてのビザンツ貨・イスラム貨に、國際通貨の名を冠するのも、あえて不当でない。そして、上にふれた國際商業という観点から、かかる金貨の機能が分析され、かつ流通過程を明かにすれば、中世初期經濟の質的規定も、もつと明確になる筈である。最近の C. M. Cipolla, Money, Price, and Civilization in the Mediterranean World, 5th to 17 Century, 1956 や Lopez (中世のトル) の、かかる方向へのアプローチも、実は經濟學の概念が、あまりにも無難作に導入されており、せつかく「自然經濟」「貨幣經濟」の二律背反の縛から脱却したわれわれは、かえつて經濟學的概念の混融のために解明への光明を見失いはしないかと危懼を覚える。それ故、A. E. Monroe, Monetary Theory before Adam Smith, 1923, P. Enizig, Primitive Money, 1954 等による、アダム・スミス以降の通貨理論の、中世初期の經濟現象への適用如何という反省に、もう一度立ちもどる必要がある。

## 二、北方商業

ビレンヌの関心は、主にローマニアに向けられ、ゲルマンによつて推進された北へのびる經濟的發展は、十分に考慮におかれなかつた。したがつて、ゲルマンの遠距離商業の培養土となつたフリースランドを舞台とする中世初期北方商業の展開も、かならずしもビ

ンヌ構想に合致するものではない。

フランク王国の経済と中世初期の北方商業との交渉については、古くは E. Patzelt, Die fränkische Kultur und der Islam, 1937 や H. Arhman, Schweden und das Karolingische Reich, 1937 の示唆がきつた。近頃は H. Jankuhn, Die fränkische-friesische Handel zu Oorsee in Mittelalter (Vierteljahrschrift für Sozial u. Wirtschaftsgeschichte, 40, 1952, Heft 3) が、多くの側面を明らかにしている。ローマ時代、すでにフリースランド人の商業的活動が文献上、考古学の上から確かめられるが、ライン下流のドレストアト (Dorestad) を中心として、ライン上流、フランドル地方の生産品を北へ、イングランド、スカンジナビアへ供給したこの商業とフランク王国との経済的関連との究明は、中世経済史の構図を正しく描くため、極めて重要な課題を含んでいる。この研究の出発点として、つねにおけられるのは B. Rohwer, Die Friesische Handel in frühem Mittelalter, 1937 である。その後二〇年間、商路、商品トレーガー等について詳細にわたる北欧考古学、銭貨学の成果の集積は B. Rohwer の研究をまじりたく一新したかの感がある。就中、H. Jankuhn, H. Arhman, S. Paulsen, Coeles 等の業績は高く評価されねばならぬ。そして、今日、これら諸学者によつて積み重ねられた資料にもとづいて、従来の研究成果が新たに批判、総合されるべき段階に達しているといえよう。メロビンク時からカロリング時代のフリースランド商業の変遷は、大よそ、つぎのように総括してさしつかえないかと考へる。

メロビンク時代に関しては、北海沿岸・ライン河流域を支配し

たフリースランド人は、メロビンク王朝と北海沿岸との通商の仲介者として、六世紀あるいは、それ以前の商業活動に重要な役割を演じている。ただ、装飾品、精巧なガラス器などの奢侈品を主な商品とした関係上、ローマ時代やカロリング時代に比べれば商業規模は小さい。しかし、七世紀には、ラインの商路は発展し、八世紀半ば頃には、マインツ→ドレストアト→ハイタブ (Hautab) ないしロンドンへのカロリングの北方商路が貫通する。したがつて、この商業活動の活潑にともない、北海とライン流域をむすぶ地域は、地中海周辺地域にとつて代り、八世紀後半から九世紀にかけての約七〇〇年間は、ドレストアトを中心とするフリーランド商業の最盛期とされる。この商業は、ライン地方の陶器、ガラス製品、石材を主な商品とし、ドレストアトを拠点として、ライン河口地域からスカンジナビアやイングランドへは、主に葡萄酒、手細工品を運び、奴隷、毛皮を対貨とした。

以上が、現在の研究から概観されるフリースランド商業の事情であるが、なお考古学上解決を待たれるいくつかの問題が残っている。例えば最近の H. Jankuhn や H. Arhman のハイタブやビルカの発掘は、装飾文様や銭貨の上から、カロリング時代のハイタブ、ビルカ、シレスヴィヒの三者の相互的通商関係は十分に明確になつてはいるが、商路、商品等についてなお不明の点を残している。あるいは、ひと口にフリースランド人とよばれる商人の実態にまつわるあいまいさも払拭されるならば、さらにこの商業の全ぼうも、一層はつきりした輪廓を示すことにならう。なお、一〇、一一世紀のスカンジナビア (ハイタブ、ビルカ) やライン流域 (ドレストアト)

におけるフリースランド商人の集団組織は、北欧のマーチャントギルドの先駆的形態と考えられているが、ハイタブやビルカの発掘は、それらが、職業上の組合に組織された移動商人の拠点たる *Mark* として、都市的生活を予言する起源的要素を明らかに指示していること、そして、それらがブラーニッツやエンネンの都市起源論に摂取されていることは周知である。

さて、イングランドのノルマンコンクエストが、フリースランド商業終末の時期とされているようだが、中世経済史上、フリースランド商業の意義をどのように理解すべきか。D. Jellema, *Frisian Trade in Dark Ages*, (Speculum, Vol. XXX, No. 1, 1955) のつぎの指適は、傾聴に価しよう。

メロビンク時代の経済とカロリング時代のその相違についての論争はあやまつてゐるのではないか。二つの時代の経済の推移を *strong economy* から *weak economy*, あるいは、その逆の過程とみる必要はない。むしろ、南から北への地理的推移と考えるべきではないか。西ヨーロッパがビザンツという先進経済圏のヒンターランドであつたメロビンク時代の地中海中心の経済に、カロリング時代には、ライン、北海に集中する経済がとつて代る。それは、あたかもフランクの政治的文化的中心が、ほぼ同時代に南から北へ移行したのに対応する。地中海となお接触を保ち、主として奢侈品を内容とするメロビンク時代の経済が、ローカルな粗製品に基礎をおく経済より強力か弱いかという論は、主観的な主張にすぎない。

ここにおいて、カロリング時代をメロビンク時代経済の発展 (*Renaissance*) あるいは、衰退 (*Decline*) の過程とみなすかどつた

論義は、経済繁栄地の地理的移行の裡に解消されいといつてよい。つぎに、ヴァイキングが、北方商業にどのような破壊的役割を演じたか、ないし、どのように商路を変えたか、かつ都市成立の問題にいかなる関連をもつたかが検討される。ヤンクーン、アルプマンの発掘の領域が拡大されるにつれ、ヴァイキングの破壊的影響は、可成り小規模に見積られねばならぬ段階に至つてゐるし、平和的通商、略奪的行為の商業史に残したそれぞれの痕跡も、可成り判別されてきた。しかし、精密な個別的データが積まれてゐるようであるが、これらをふまえた新しい総括的研究は、いまのところほとんど見当らない。そのような現状から、H. Arthman, *The Viking*, 1958 の上梓が、大きな期待がもたれるゆゑである。

### 三、商業復活の意義

ヨーロッパ経済史上、一、二世紀を「商業復活」なる標語のもとに、画期を認めるのが普通となつてゐる。ブラーニッツは都市の発達の上から一、二世紀を「革命的な新時期」とよび、マルク・ブロックは、社会、経済、法制史上の深き洞察から「ヨーロッパ社会の発展を永久に印した極めて深刻な一、二世紀の截目」を認め、チポルは、貨幣の多量流出と労働の多岐にわたる分化にもとづく経済変化が一、二世紀を特徴づけるものとする。しかるに、ロベッ、レストクワは、ほぼ同様に、中世商業および商人の活潑な活動を促進した経済的変革期を一〇世紀に求めようとする。(Lopez, *Still another Renaissance?* LVII, 1951; H. Lesclapoy, *The Tenth Century*, *Economic History Review*, XVII, 1947) ロッセ、語(真

実な意味において、ルネサンスなる時期は、歴史上10世紀において他にあるはずはないとのべ、経済史上「商業革命」(Commercial Revolution)のモメントを10世紀ヨーロッパの経済現象に求めている。

最近の都市研究がひとしくみとめることは、中世初期における遠距離商業と、それにたずさわる商人の存続ということである。したがって、ビレンヌが考えたような中世商人の起源説は、否定される傾向にある。ロベツ、レストクワ―多少の違いはあるが――ざわだつた人口の増加、10世紀後半のアラビア、ノルマン、マジヤール人等の外敵侵入の後退、主として東方からの商、工業技術の輸入等の契機を重視し、中世高期の大商人の系譜が、10世紀に遡りうることをもつて、10世紀の印した経済上の変革とする。

ロベツ、ロムバールの所説から、中世前期(10世紀まで)における西ヨーロッパをめぐる、イスラム、ビザンツの貿易の傾向は、つぎのように一般化してさしつかえないと思う。西ヨーロッパは、イスラム諸国に対しては、木材、奴隸、鉄、毛皮を輸出、イスラムからは少量の奢侈品を輸入。またビザンツに対しては、ビザンツの仲介する奢侈品および若干のビザンツ自身の生産品を輸入し、輸出すべきものをもちたず。この時期においては、西ヨーロッパは、イスラム諸国、ビザンツに比し、総じて低物価にあつたと考えられ、絶好な買手市場であつたわけで、この好機を巧みにとらえたのが、イスラム商人であつた。またビザンツは、対イスラムの入超を対西ヨーロッパの出超で辛じてカバーし、たえず金の涸かつに悩みながら、国家の経済政策の強力な推進とあいまつて、経済的繁栄をほこ

り得た。したがつて、このような西ヨーロッパの対イスラム、ビザンツの貿易関係の転換(つまり、西ヨーロッパの対外市場における購買力の復活)をもつて、ヨーロッパの商業復活の一つのモメントと認めることも可能である。その一つの原因が、ロムバールのいう如き、西ヨーロッパへのイスラム金の流入と考えるのも、かならずしも不当ではない。しかし、このような、西ヨーロッパの貿易関係の転換を可能ならしめる要因は、さらに、それぞれの経済圏の商業の背景となつている工業、技術、農村等の生産構造の諸関係について検討されることにより、明瞭となるであらう。

おわりに、都市成立の問題に一言ふれよう。

都市の成立を法制的、地誌的に説明しようとする古き伝統があるが、一方において、経済的にこれを明らかにしようする努力もある。そかにされていけない。すでにふれた金の回流の上に都市の発展を跡づけようとするロムバールの構想も、レストクワの都市成立の経済的主体としての *patriciate* の研究も、いずれも、そうした努力の現われとみてよい。しかも、そうした研究が、過去の都市類型論を無意味なものとなしつづつあることも見落せない。エンネン女史は、一九五五年の第一〇回国際歴史学会に提出した報告 (*Le moyen Age* 誌 1956, No. 4. の論文 *Les differents types de formation des villes européennes*) のなかで、一定の経済的基準のもとに、ヨーロッパ中世都市における大都市、中都市、小都市の各タイプを示している。そしてさらに視界を拡げて、イスラム都市、ビザンツ都市、東洋の諸都市をこめて、包括的に都市の類型が論じられるならば、対目的に西ヨーロッパの都市の形像が、より鮮明に浮彫りにされることにならう。